
異世界日記（仮）

雨流 光希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界日記（仮）

【Nコード】

N8233Z

【作者名】

雨流 光希

【あらすじ】

俺こと、一雙翔太^{いちそうしょうた}は現実に絶望していた。大学受験を間近に控え、受験勉強を必死に頑張っていた俺へ届いた悲報。

両親が事故にあい他界したと。

だが、悲劇はそこで終わらなかった。

両親の遺産目的に群がった善人ヅラした親戚達。

法律の事など詳しく知らない俺は、親戚達の口車に乗せられ、住む

家さえ奪われる。

心身共に弱っていた。

そんな俺の前に、自称神の一人の女が現れる。

女からの誘いはこの世界に絶望した俺に断る理由は見当たらなかった。

底辺からの逃亡

夜の闇に包まれた街だが、まだまだ眠りにつくには早いと言わんばかりに街には光が溢れていた。

街灯、車、コンビニ、看板。そして、クリスタスイルミネーション。光源となる物に不自由はしない。また人が途切れも無く歩いている。普段なら会社帰りの人が半数以上だが、今日はいつもとは違った。

今日はクリスマス。イブに会えなかった恋人達、クリスマスを祝う親子連れ。街全体が浮かれ、街ゆく人は、大多数が幸せそうに笑っている。

そんな中、肩を落とし力無く歩く少年、いちそうしゅつた一雙翔太も去年まではその輪の中にいた。

毎年行われていた家族三人によるクリスマスパーティー。パーティーと言ってもクリスマスツリーを飾り、母親の作った料理を食べるささやかな物だった。

だが、今年からは永遠にそのパーティーが開かれる事は無い。

一週間前の事故から、彼のこの世界での人生の歯車は原型をとどめない程、壊れてしまった。

両親の死の悲しみに浸っていると、親戚が押しかけ、いろいろな書類にサインをさせられた。

そして今日、サインをした書類を持った弁護士にこう言われた。

「この家はもう貴方の物ではありません。今すぐに出て行ってください」

翔太は理解した。嵌められたと。

嵌められたと気付きはしたが、即時退去させられる事には疑問を持たない。両親を失い、親戚の裏切りに会い、思考能力が極端に低下していたからだ。

力無く歩き続け、翔太は街の雰囲気から逃れるように、市民公園の中に入る。

市民の憩いの場として作られ、ジョギングコースや、大きな滑り台のついた高さ20m程のロケット型の遊具。夏にプールとして使用されている場所は、今は蓋をされテニスコートになっている。

朝にはジョギングをする人や、犬の散歩をする人で賑わい、昼は子供たちの声が途切れなく聞こえ、夜にはカップルなどが話す場として利用する人気の公園だったが今日ばかりは人影が見当たらない。カップルに人気の公園でも今夜ばかりはクリスマスイルミネーションに軍配が上がった。

「はー」

街の光の届かない公園の奥の方まで歩いてくると、翔太はベンチに腰を下ろした。ベンチはとても冷たかったが今の翔太にとっては些細な問題だった。

今まで甘やかされていたとまでは行かないが、普通の生活を送っていた翔太には、これからどう生きていけば良いのかあてがない。厳密に言うところの世界で生きて行くのが嫌になっていた。

今の翔太を見た者は、「何を甘えた事を考えているんだ？世界にはお前より不幸な境遇の奴がいるんだ」と翔太を叱るかも知れない。

当たり前のように送っていた生活が、急に壊れる者の気持ちかわかる者なんて滅多に居ないだろう。

「ね。君」

不意に女性に声を掛けられる。翔太は顔を少し上げるが、自分に声を掛けてくる者は居ないと直ぐに視線を下に戻す。

「無視しないの」

少しいじけた様な声を出した女の声。そして首に何か暖かい物を置かれた。翔太はそれを手に取り視線を女に向ける。身長160センチ程で、メリハリのある身体つきに、巨乳ではないが、整った胸元を強調するかの様な改造巫女服。下はひざ上5センチのミニスカートを履いた、赤い髪を腰まで伸ばしたロングヘアの美女がそこにいた。

見た目は整っているが、服装により街にいと激しく浮くであろう。美貌と服装により周囲から集める視線は普通の美女に比べたら、段違いに多いだろう。

「不幸な顔をした君に神様からのクリスマスプレゼント」

缶コーヒーを置いた女は笑みを浮かべている。

「どーも」

素っ気ない返事を返し受け取った。

「ね。君、絶望してるでしょ？」

「なんでそう思う？」

いきなり表れ、心の中を読まれたとは思えない女の言葉に冷たい声で質問を返す。

「神だから。私の質問にも答えて、この世界に絶望してるんでしょ？」

笑みを崩さないで言う女。笑みを浮かべているが、翔太の瞳に映る女は冗談を言う様な女には見えなかった。親戚に騙される様な自分に見る目があるかは疑問だが、神だといわれ思わず信じてしまう程の不思議なオーラがある。

「絶望してたら、なにかあるの？」

「他の世界に連れて行ってあげるわ」

「それもいいかもな」

翔太は自称神の誘いにあっさり乗った。何もかもを無くした翔太には、この世界に未練は無い。翔太の返答に女は頷き、トランプ大のカードを差し出してくる。カードを受け取り見て見るも何も書かれていない。

「ちょっと指借りるよ」

右手をカードの上に置かれる。その瞬間、人差し指に痛みが走り、赤黒い血が一滴カードに付いた。だが、指には傷一つついていない。

「貴方の情報入れたわ。向こうに行ったら身体の中に入って貴方のステータスを勝手に記してくれるし、身分証明書がわりにもなるから、見たいときはステータスって言えば出るわ。じゃ、行つてらっしゃい」

ベンチに座っていた翔太を立ち上がらせ、女は力一杯その背中を押す。

すると、翔太の目の前の空間がガラスの様に割れ出来上がった穴の中に翔太は吸い込まれていく。

「なー、今から行く世界は楽しいか？」

「比べられないぐらい楽しいわ」

「そっか」

苦笑を浮かべ、翔太は完全に吸い込まれた。

「頑張ればね」

何かを期待する様に言った女の言葉は、翔太の耳には届かなかった。

暗闇の中で（前書き）

ちよつと修正か追加はいると思います。

暗闇の中で

押し込まれるという表現がぴったりの方法で入った空間の割れ目。その中では見渡す限り闇だった。全身が入るとともに、割れ目から見えていた向こうの世界が消える。公園以上の静寂。ここを表現するのに適切な言葉は、漆黒だろう。光源のない暗闇の中に翔太はいた。

「今の俺の心の中が見れたらこんな色なのかな」

自虐的になりそんな言葉を口にしても、当然の様に誰からも答えは返ってこない。漆黒によち視界は利かないが、誰も居ない事は用意に想像がつく。もし誰か、もしくは何かがここで生きているのなら、何も音がしないのは不自然だろう。ここには自分しかない事を確認する為のつぶやきでもあった。反応は無く。やはり自分しかないらしい。

「ははっ」

乾いた笑いが自然と口からこぼれた。血のつながった者に騙され、今度は自称神にも騙されたのか。もしこの空間に死ぬまで閉じ込められるのだとしたら、間違いなく寿命を全うする前に、自害するだろう。例え自害をしなくても、狂うことは目に見えている。

「なにかおかしい事があったのか？」

まだ入ったばかりなのに狂ってきた様だ。幻聴が聞こえる。優しい声が聞こえた。聞こえてきた声は低く。翔太が知っている誰の声にも当てはまらない。

「聞こえているのか？」

優しい声は心配げな声に変わっている。辺りを見回すが誰もいない。やはり幻聴のようだ。俺は優しさに飢えているのか。

「ついに幻聴が聞こえてきたか」

「幻聴ではないぞ。ゆえあって姿はみせられぬがの。遅くなつてすまん。水先案内人のゲーテじゃ。さすがにこの空間で人を探すのは苦勞する。わしも歳をとったものだ」

声は謝罪の言葉をのべ、自分が案内人だと話す。依然、翔太の中では幻聴という認識は変わらなかった。騙され絶望し異世界に行くと決意したため、軽い人間不信に陥っている。自称神の誘いに乗ったのも、何もせず、絶望だけしていても仕方がない、抜け出せるなら悪魔の誘いにも自称神の誘いでもいいからのってやるという投げやりな考えをしていたからだった。

「聞こえているのなら大丈夫そうかの。さて、現在そなたが向かっているのは、一言でいえばファンタジー世界というもののだの。魔物が存在し、ダンジョンがある。また魔法も存在する。いつてしまえば、なんでもありの世界じゃて、成り上がるのも惨めに暮らすのも自分次第。ある程度人生のルールが決まっているそなたの世界とは違う。命をかける覚悟はあるかの？」

優しい声に問いかけられ、俺は迷わず答えた。

「人生を謳歌できるなら」

「・・・それならいいんじゃない。そろそろ着くぞい。わしからひとつ。贈り物をしよう」

優しい声は少しの沈黙のあと答えた。何かを迷っているようにも聞こえた。贈り物？姿も見せないのにどうやって？翔太が疑問に思っている、答えはすぐに形を伴って現れた。一切の光のない暗闇から、小さな光の玉が一つ現れる。大きなビー玉ぐらいの大きさの光は、翔太の胸にくっついたと思うと、吸い込まれていく。

ここでやっと翔太は幻聴では無いことがわかった。光の玉が入った胸は暖かく、声の主が微笑んでいるように思える。それと共に頑張れと激励されているように思えた。翔太がお礼の言葉を口にしようとする、暗闇が裂け、またその裂け目に吸い込まれはじめる。どうやらこの暗闇が女の言っていた世界ではなく、通路のようなところだったらしい。

「そなたの行く先に幸福がある事を願う」

「ありがとう！」

優しい声の主に届いたのか翔太にはわからないが、裂け目が閉じる寸前に大声で礼を述べた。翔太がいなくなった空間には再び静寂に包まれる。

「わしにできるのはこれぐらいか後はそなた次第だ」

翔太の境遇を女から聞いていて知っている声の主は優しい声音でつぶやいた。答えるものは誰も居ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8233z/>

異世界日記（仮）

2011年12月26日21時53分発行